

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

③国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリー等による教育課程の充実

●広島大学理学研究科数理分子生命理学専攻

「数理生命科学融合教育コンソーシアムの形成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

明治大学、龍谷大学それぞれと大学間包括協定を締結し、両大学とは単位互換できる制度を整備した。実際に、広島大学の大学院生が明治大学で開講される数理系講義に参加し単位取得する例があった。また、逆に明治大学・龍谷大学の大学院生が、広島大学で開講される実習科目「プロテオミクス」あるいは「科学リテラシー概論」の単位を取得する例も出ており有機的な交流が実施された。それぞれの大学が持つ特徴を生かした講義科目を、学生が必要に応じて自由に選択できる機会を提供することは、コンソーシアム形成で目的とした項目の1つであった。学生にとっても、自身の大学で開講されないが将来のために取得したいと考える科目を、単位取得という明確な動機付けをもって真剣に講義に望めることは大きなメリットであると感じているようである。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

大学間で単位互換科目としてどの科目を認定するかを工夫した。広島大学では、明治大学・龍谷大学側ではあまり扱わない生命科学実験を伴うような実習科目および科学リテラシー、MOT科目などを提供することを特徴とし、明治大学・龍谷大学側では数理系基礎科目、現象数理系科目など数理系講義科目の提供を特徴とするような「色分け」を意識した。また、実際の実施にあたっては該当科目を集中講義として提供し、相互に地理的に離れた位置にある大学間での講義の聴講を短期滞在で可能とするようにして、学生が現実に聴講できる体制を整備した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

実際に単位互換協定を結んだ大学での講義を聴講した学生の感想から、普段と違う雰囲気や、自身の大学では聴講できない内容の講義を聴くことができたことは良い勉強になると同時に、良い刺激にもなっているようにうかがえる。広島大学・明治大学で単位互換講義を開講する際には、同時に学生交流会を開催して、学生間での研究発表会を行うなど「イベント」も行い、学生同士が相互に知り合えるようにする工夫をした。このため、他大学に聴講に出かけた折にも講義だけを聴講して戻ってくるのではなく、友人関係をひろげ他大学の「文化」にも触れさせることで、自身の大学内だけで生活しているよりは多様な価値観を持つよう

になってきているようである。